

講演

よさこい系祭りをめぐる基調講演と鼎談——司会者より

法政大学 鈴木 晶

「ダンスと若者文化」をテーマとした第55回舞踊学会大会はその2日目に、社会学の立場からよさこい系祭りを研究しておられるだけでなくご自身も祭りに参加して踊っておられるという内田忠賢氏と、民俗舞踊研究者の吉川周平氏をお迎えしてシンポジウムを開催し、昨秋、ポルトガルの国際舞踊学会「PULSES AND IMPULSES」でよさこい系祭りについて研究発表した私が司会を仰せつかった。

よさこい系祭りの発祥地は高知市である。隣の徳島県の阿波踊りが巨大な観光資源となっていることに刺激され、市の商工会議所が1954年に始めたのが「よさこい祭り」である。商工会議所から依頼された音楽家の武政英策が民謡・童歌を合成して「よさこい鳴子踊り」を作詞作曲し、地元5流派の舞踊師範が合同で振り付けたのが「正調よさこい鳴子踊り」である。祭りの第一回目には21グループ、750人のダンサーが参加したが、その後順調に成長を続け、2002年の第49回では参加グループ数157、参加者数17000人となっている。第4回目には地方車が登場し、現在ではどのグループも地方車に先導されることになっている。第5回にはマンボ調が登場し、1970年代になると、多くのグループがロックを取り入れるようになった。

一方、札幌で開催されている「YOSAKOIソーラン祭り」は、高知市のよさこい祭りのイミテーションあるいはコピーとして1992年に始まった。始まったきっかけについては、いろいろな説がある。第1回は参加グループ10、参加者数1000だったが、急速な成長を遂げ、90年代以降に参加者数がほぼ横ばい状態になったよさこい祭りをあつという間に追い越し、2003年の第12回では参加グループ330、参加者数44000となっている。現在も、よさこい系祭りでは国内最大のイベントである。

YOSAKOIソーラン祭りがよさこい祭りの模倣として始まったのであるから当然だが、両者の規則は同じで、基本的には、「踊り手は手に鳴子をもつこと」と、「音楽は（高知の場合は）よさこい節（札幌の場合は）ソーラン節を含むこと」、の二つである（そのほかに、曲の長さは決められており、また舞台上と路上の2バージョンが必要とされる。また1グループの人数の範囲もそれぞれ決められている）。これを裏返すと、「鳴子をもってさえすれば振付は自由」「よさこい節あ

るいはソーラン節を含んでいれば音楽も自由」ということであり、この自由さがプレモダン時代の盆踊りと大きく違う点である。伝統的な盆踊りは基本的にみんなが同じ音楽と同じ振りで踊るものであり、よさこい祭りを生むきっかけとなった阿波踊りでも、振りは自由だが、全体として眺めると、そこに統一感があることは否定できない。

これをジャン＝フランソワ・リオタル『ポストモダンの条件』のテーゼ、すなわち「大きな物語」の崩壊をもってポストモダンの指標とすると、このテーゼにあてはめてみれば、伝統的な盆踊り（阿波踊りのように現代的に衣替えて生き延びたものも含め）はプレモダン／モダンに相当し、よさこい系祭りはポストモダン時代の盆踊りと見なすことができよう。吉川氏が指摘するように、果たしてよさこい系踊りを盆踊りと見なすことが適切かどうかという問題はありますが、私は盆踊りの現代版と見なすべきではないかと考えている。

伝統的盆踊りとよさこい系祭りの差異はいろいろなところにあられている。まず、前者が地域共同体に根ざしているのに対し、後者の集団形成要素は地域だけでなく職場・学校・大学などさまざまである。また、かならずしも参加集団が開催地の共同体と深く結びついているとは限らず、遠くまで踊りに行くということも広くおこなわれている。踊り自体も、前者が「日本的」舞踊であるのに対し、後者は、内田氏が統計資料で示されたように、主流はジャズ・ダンスである。また、内田氏、吉川氏との鼎談で明らかになったように、伝統的な盆踊りのもっていた性的要素が現代のよさこい系祭りには希薄だという差異もある。また、よさこい系祭りの衣装・振付に「ユニセックス」志向が顕著であることも指摘しうる。

だが、さらに詳しく観てみると、ひじょうに興味深い事実が見えてくる。現在、ある資料によると、全国200箇所以上でよさこい系祭りがおこなわれているという（内田氏は400を上回っているのではないかと推測している）。このような全国的展開が始まったのは、YOSAKOIソーラン祭りが始まってからのことである。高知のよさこい祭りは50年余の歴史をもつが、YOSAKOIソーラン祭りが始まるまで、全国に普及していくことはなかった。よさこい祭りが今日にいたるまで一貫して「地方のイベント」でありつづけたのに対し、

YOSAKOIソーラン祭りは最初から全国区だったのである。これは非常に興味深い問題だが、答えを出すのは容易ではない。鼎談の際、会場から「よさこい祭りは高知テレビでしか取り上げられないが、YOSAKOIソーラン祭りは最初からNHKの全国ネットで放映された。これが全国的普及を促した」という意見が出たが、おそらくそれは原因というよりむしろ結果であろう。

よさこい祭りで使われる「よさこい節」よりも、YOSAKOIソーラン祭りで使われるソーラン節のほうがずっと現代的で、しかも古くから全国的に知られていることは理由の一つであろう。

だがそれだけではあるまい。YOSAKOIソーラン祭りがよさこい祭りのコピーとして始められたことにも原因があると考えられる。高知のイベントが札幌に移植されたということは、地方から首都へ、そして全国へという展開ではなく、地方から地方への伝播・移入である。オリジナルはオリジナルであるがゆえにその地方性に縛られていたのだが、コピーはコピーであることによってその地方性を脱ぎ捨てることができたと考えることもできよう。つまり、1はいつまでたっても1だが、2が生まれると、3、4、5と無限に増殖してい

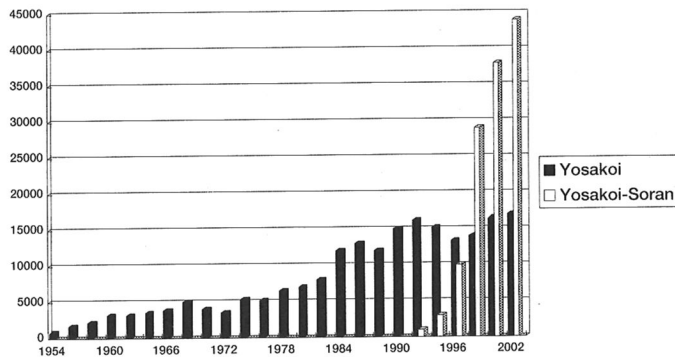
くのである。

YOSAKOIソーラン祭りが始まった1992年前後に日本社会が大きな変動期を経験したことも、この問題と大きく関わっているのではないかと考えられる。アレクサンドル・コジェーヴは、いわゆるポストモダニストたちに多大な影響を与えた『ヘーゲル読解入門』において、ポストモダンの到来とともに社会は二つの極端な形に分化すると述べた。二つとはスノビズムの社会と動物化した社会であり、コジェーヴによれば、前者の代表が日本、後者の代表がアメリカである。だが、東浩紀『動物化するポストモダン』によれば、日本社会は1980年代末から90年代初めにかけて大きく変動し、スノビズム社会から動物化社会へと移行したという。

この大変動とよさこい系祭りの爆発的浸透との間にはなんらかの関係があるのではなからうか。東浩紀は、ポストモダン社会では大きな物語が崩壊した後の、物語の断片がデータベース化し、物語ではなくもっぱらデータベースが消費されるという。よさこい系祭りにおける、自由に組み替えられる衣装、音楽、振付が示しているのは、まさに盆踊りのデータベース化ではなからうか。

(表) よさこい祭りとYOSAKOIソーラン祭りの参加人数の推移 1954-2003

(筆者作成)



第12回 (2003) YOSAKOIソーラン祭りの様子 筆者撮影

